

## 『資本論』の方法論的体系

梯 明 秀

昭和四十年年度第十二回研究会（十二月十七日）報告要旨

### 一 は し が き

報告の内容は、毎学年、学部で講義をしている事柄の一部分に限定した。毎学年の講義内容としては、まず序論として、マルクス主義の成立を、その三源泉から簡単に説明し、つぎに第一篇としては、マルクス主義の成立を、その歴史的、社会的な背景から説明し、そして最後に第二篇として、マルクスの『資本論』を学的体系にまで構成するにいたった彼の思想過程とその成果とを、ヘーゲルの『論理学』ないし『精神現象学』を媒介にして追思惟してゆく、という仕方の説明することになっている。ここで講義内容のことに触れる必要はな

いが、右の第二篇の内容は、わたしの今までの継続的な研究の主要部分をなすものであり、したがって、わたしの『資本論』研究としての諸著作のなかに、詳細に論述されているが、しかし、なお多くの未解決の問題を残していることは、いうまでもない。それにしても、とにかく現在までに成就しえただけのもの——すなわち『資本論』の学的体系を主体的に把握することに、いちおうの見とおしを付けることができたという研究成果——を、学生たちに理解しやすいように努めたい。うえで、それについての講義をしているわけである。そして、本報告も、また『資本論』の学的体系を、わたしが主体的に把えなおし得た研究内容の一部分を、講義のばあいよりは、簡略にして、同僚諸氏に問題を提起し、逆に教示を受けよう

としただけのものであった。

そういうわけで、いいかえると、わたしが新たな一歩を前進せしめた研究の内容について、この研究会で報告をしたわけではないので、本報告の内容をレジュメとして執筆することには、なかなか気を進めることができなかった。執筆するとすれば、わたしの諸著作に述べてあることを繰り返かえして書いてゆくわけで、わたし自身にとっても、わたしの諸著作をすでに読んでくれている同僚諸氏や学生諸君にとっても、なんらの新味がないからである。こうして、編集員の立場とわたし自身の気持との板ばさみのうちに迷っているうちに、或る一つの仕事——大学院マスターコースの一年生修士論文を書き直させたこと——を想い出して、院生諸君を指導するという意味で、本報告の内容としては、その重点をおかなかつた点について、論述しておく必要を感じ、そのための前提としてならば、このレジュメが、わたしのすでに諸著作に論述したこと、たんなる繰り返かえしであっても、また己むをえないことであり、また執筆の手続きのうえから必要なことでもある、と考えるにいたった。このように決心がついたというわけであるから、このレジュメは、研究会の報告内

容については、わたしの諸著作を一つ一つ参照していただくようにして、いっさいの論証的な叙述は省略してゆくことにしてあることを、ここに、まえもって、お断りして、ここに了恕を請うておくしだいである。

#### 一一 マルクス主義成立のためのゲネアロギー

本節のうちに、研究会における報告の内容を、その全部にわたって、右にお断りしたように、ただ暗示的な様式で、したがって読者の推察を期待するという仕方、執筆しておくことにした。それにしても、報告テーマのためにも、毎学年の講義で序論として講述している内容にも、当然ながら、話しの順序として最初に触れねばならなかった。本節に挿入しである「シェーマI」が、それである。

この図式を一見して理解していただけるように、それは、ただ、レーニンのマルクス主義の成立のための三つの思想的源泉を、マルクスが、どのようにアウフヘーベンして、そして、その後、一般にマルクスの経済学者としての研究の前進過程を、図式化したものである。ところで、——第一に、この図式では、急進リベラリストとしての若きマルクスは、四四年の『経哲手稿』をもって、はじめてマルクス主義者と

なりえた、ということにしてある。わたしが『経哲手稿』のなかの「疎外された労働」なる体系的な断片を、わたし自身の労作のテーマにしたのは、戦前の昭和十年の二月に同人社刊行の『社会』という雑誌に発表したところの「人間労働の資本主義的自己疎外」なる論文においてであって、その副題は「価値増殖過程の論理的意味」となっている。このところの一連の『資本論』についての、いな、それにアプローチするための四篇の労作は、敗戦後に「補説」を附加して『資本論の弁証法的根拠』（旧版）として弘文堂から刊行しておいた。

しかし、マルクスの『経哲手稿』をもって、マルクス主義成立の出発点に位置づけるという、いま述べたところのわたしの確信なるものは、戦後になって再び、わたしが『資本論』を「論理学」として読むという立場でもって、或る程度の研究が進捗しつつある過程で、いまだ確信にまで固まらず、流動的な意識状態であったところから、それを一つのテーマとして取りあげて見ようとした後に、わたしの心のうちによりやく定着したものであった。戦後におけるわたしの諸労作は、敗戦直後のわたし自身の生活体験を告白した『戦後精神の探

究』に収めた二篇の論文——季刊『理論』誌、昭和二十三年二月発表の「精神のこの病」と、旧『展望』誌、二十四年五月発表の「時局の精神的断層」の二つの文章——をのぞいて、すべては、いましがた述べたところの「資本論を論理学」として読む」という研究方針で貫かれたものばかりである。

別に「社会科学」を学問的体系として樹立しようという意図もあつたが、それも、『資本論』のそれをモデルにしたものか、それへのアプローチとしての、法学、ないし古典経済学についての暫定的な研究にとどまっている。現行版の『資本論の弁証法的根拠』（有斐閣、二八年四月刊の改訂版）に「増補」として収録してあるところの、二八年五月に本学の人文科学研究所発行の『紀要』第一号に発表した「市民社会におけるの市民の自覚的解放」なる論文が、その副題を「マルクスにおける自己疎外と具体的「般者」としてあるにかかわらず、右の確信の芽生えとも見るべき叙述は、なかつたかと推定しうる。そのような萌芽としての思想を漠然と論述してあるものは、それより三年まえの二五年三月に、筑摩書房の『哲学講座』第四卷に収録すべく依頼されて執筆した「哲学と社会科学」なる論文——絶版となっている旧著『資本論

の学問的構造』（弘文堂版）に収録してあったが、今回、雄渾社から『社会学から社会科学』なる書名の論文集のなかに再収録してある——の第五節「資本論における哲学と科学との一致」の最初のパラグラフのところで、マルクスのいわゆる「後方への旅」としての上向的叙述の出発点としての端緒的商品に關係して、きわめて簡単に述べた箇所である。

そこでは、端緒的商品を「われわれに否定的に対立する資本家的富」の要素として「自己疎外的に直観される」と述べてある。このような端緒的商品についての解釈は、当時までの、そして現在にまで一般に流布されている『資本論』の多くの解説書に見られる客観主義的な立場と明確に差別されるものである。学問的体系としての『資本論』を主体的に把握しなすべきだということは、わたしとしては、戦前から主張してきたところであり、さきに挙げた旧版『資本論』の弁証法的根拠』所収の連続的な四篇の論文も、この目的をなんとか実現しようとするための試作であった。そして、マルクスの自己疎外論についての、よりいっそうの突っこんだ分析への努力も、一般に支配的な学界ないし論壇の唯物論にたいする理解が、あいもかわらず客観主義的偏向にある事態にた

いするところの、わたし自身からの反撥から出発したものであった。それにしても、唯物論における主体的契機を、具体的に、しかも全面的に展開することは、ただマルクスの自己疎外論だけから出てくるものでなく、わたしとしては、色々の角度から試行錯誤的にアプローチしているのが現状である。そこで、このようなわたしの研究における、わたし自身の遍歴において、マルクスの自己疎外論を、わたしのいわゆる主体性の立場において、取り上げることができたのは、いま述べたように、マルクスの端緒的商品を問題にするばあいであったのであるが、若きマルクスがマルクス主義を始めて確立したのは四四年の『経哲手稿』においてであった、という先きに述べておいたところの、わたし自身の主張は、『資本論』の全体系についての主体的把握というテーマについて、いちおうの見とおしが付いた頃に自覚されたのではないかと思ふ。

戦後における右に述べてきたような研究的諸労作は、二、三の長文のものを残して、二冊の書物、すなわち『ヘーゲル哲学と資本論』（未来社、昭和三四年発行）と『経済哲学原理』（日本評論社、同三七年発行）との中に収録してあるが、前

者の方は、『資本論』の学的体系性に関するものを編集し、後者においては、端緒的商品の主体的把握という課題にたいして、『経哲手稿』によって、——とくに、そのなかの体系的な一断片「疎外された労働」の、いっそう体系化した説明をつうじて、——解答を与えたところの、二篇に分けて本誌の第三巻第五号から第四巻第二号までに連載したものに加筆し、「緒言」と若干の補足的文章をアレンジして一篇の長論文にしたものが、その主要内容となっている。すなわち、後者の著書における第二篇「賃労働者の範疇的把握」が、それである。したがって、当面の問題としての、さきほどまで述べてきたところの、若きマルクスの学問的成長の過程で、マルクス主義が彼自身においても確立されたと確信しえたのは、おそらく『経哲手稿』の執筆中の頃であったはずだ、というわたしの主張は、後者の著書としての『経済哲学原理』の叙述のなかに、初めから終りまで、確信的なものとして一貫している、といえるわけである。なお、本誌の第一一巻の第一、二合併号（三七年六月）とその第三号（同上八月）とに、「経済学研究の出発点にある哲学的課題」なる標題の論文を掲載してあり、それ以来、わたしの『資本論』にたいする論理学

的研究は、別の仕事のために中絶したままになっているが、この論文の副題は、やはり「四四年《手稿》におけるマルクス自身の思弁哲学についての分析的吟味として」となっており、右の確信的主張を前提として、より一般的に、わたしの「唯物論における主体性の契機」について、その哲學的基礎づけの企てを明示しておいた。それにしても、右のわたしの確信的主張が、はたして学界において承認されるかどうか、それについての確信なるものが、わたし自身の主観的なものにとどまっただけで、客観性のある真理として受けとって貰えるものかどうか、ということについては、まだまだ異論の提出されうる余地を残しているのでないかとも、感じてゐる。

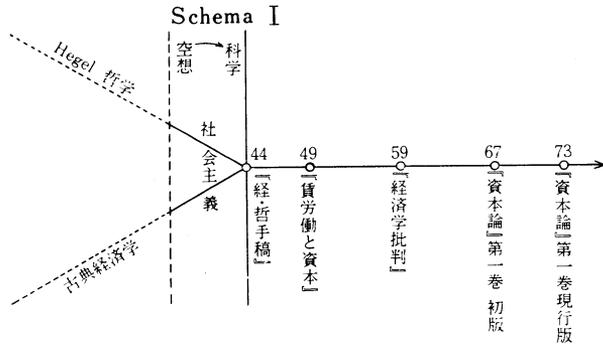
ところで、さきに指示しておいたところの「シエーマエ」の説明の方に、このレジュームの叙述をもとすにあたって、この図式は、わたしの右のような暫定的な確信を軌軸として作製されていることを、まず最初に、読者知っておいてもらう必要上、わたし自身の研究生活における諸著作について多言を費してきたわけであるが、いま一つの別の理由としては、これからの叙述が、最初の「はしがき」で断っておいたとお

りに、本研究会の報告の内容については、ほとんど専ら、わたしの諸著作を参照することによって理解されうるものとして、進められてゆくほかない、ということが挙げられる。

さて、図式の左半の部分は、マルクス主義が成立するにいたるための、彼の遂行した思想的三源泉のそれぞれのアウフヘーベンの過程を、論理的に単純化して図示しただけのものである。事実としては、時期的にも、モチーフの上からも、別々に遂行され、さらにまた、批判の対象とした三つの源泉的思想を一挙にして完全に自分のものとして摂取し得たというわけのものでないのであって、たとえば『経哲手稿』にしてが、すでに、そのとおりであることを、明示している。すなわち、この『手稿』において批判的に摂取されているところの、ヘーゲル哲学は、その一部門としての『精神現象学』のなかの最初の部分、とくに「自己意識」の部分にとどまり、また古典経済学についても、主としてスミスの『国富論』に中心がおかれているだけである。さらに、また、マルクス自身の経済学研究の進展は、四四年以後において、たんに古典学派だけでなく、さらに視野を拡め、過去および現在の諸学派にたいする彼の立場からの批判にまで発展して、その立場

の基礎づけを一勞作ごとに深化してゆくことになっている。このことは、経済学界では周知のことに属するが、ヘーゲル哲学にたいする止揚の過程についても、同じことが指摘できるのであって、その学的方法論的体系を完全に唯物論化しているのは、まさに七三年以後の『資本論』現行版における体系的叙述の構想の完結したところにおいてであった。そのうえ、マルクスの経済学研究について言及しておくべきことは、それが、右のような学説史的研究だけでなく、彼の当時の各国の産業資本の段階の現状を分析して、そこに含まれる階級的矛盾を指摘し、そして将来社会を予想せしめる弁証法的な歴史的現実を貫く法則を定立しえたこと、さらに、この弁証法的な運動法則を全人類の経過してきた諸社会にまで具体化するために、過去から当時までの各国の経済史にまで、その科学的分析を厳密に遂行する素志を徹底せしめていたこと、要するに、彼の史的唯物論におけるその経済的基礎を明瞭にしたことをも、ふくむことを忘るべきでないであろう。

この史的唯物論としては、唯物史観における有名な公式どおりに、経済的土台の上層に位置づけられるべきところの、法律および政治の諸制度、したがって法学、政治学のイデオ



でも、そのばあい、それぞれの思想を形態(ヘーゲル)として制約ないし規定したところの背景的な、政治、経済的な現実の社会構造の動的な姿に、無関心でありえたはずのものでないことについても、あらためて言及するまでのことで

ロギー、さらに、イデオロギーとしても、宗教、哲学、科学、文学、その他の諸領域にわたって、彼の研究意欲を發揮せしめたことに、問題はな

い。そのいみで、マルクス主義を形成せしめるための三源泉思想を、マルクスが、それぞれ個別的にアウフヘーベンしたとし

はない。本節に掲げた「シェーマI」にあっては、そこに図示してはいない事柄であるが、三源泉の思想形態を、それぞれに制約ないし規定した当時の社会的背景としての歴史的事情は、イギリス、フランス、ドイツというように三国に区別されているが、これらの三国間の歴史的事情も、いうまでもなく、それぞれの発展段階の差異にかかわらず、実在的に相互に関連していた、ということを読者は念頭にうかべておいていただきたい。さらに、マルクスによる三源泉としてのイデオロギーのそれぞれのアウフヘーベンを、統一して彼自身の固有の立場を創造することによって、三国間の歴史的、社会的な諸事情が、その実在的な相互関連の姿を、彼の時代の各国の人びとに、よりいっそう明瞭な姿で認識せしむることになった、ということについても、わたしは一言だけ附加しておきたい。

このような二、三の注意を読者に喚起しておいて、いよいよ、「シェーマI」の左半の図式の説明に入っているわけであるが、それは、社会主義なる実践の立場にたつて、若きマルクスは、ヘーゲル哲学の方法と体系とを、経験科学としての古典経済学の実証的な因果法則のうちに批判的に適用して、

ヘーゲルの神学の立場にある観念論、およびプロイセンの絶対主義のイデオログとしての反動性を廃棄したこと、それが同時に（Ⅱ論理的な意味で）古典経済学のブルジョア的視野の狭隘さに制約された経済法則の永遠性についての願望を、弁証法による発生消滅の論理でもって拒否しながらも、資本家の富の原因を「疎外された状態」にある労働一般として、この科学的因果性を批判的に継承したことを、いみじきことになる。要するに、ヘーゲル哲学と古典経済学との二つのアウフヘーベン、別々のものではなくて一つのアウフヘーベンの両面、すなわち、二つのモメントにすぎなかったことになる。しかし、また同様に、哲学と経済学とを同時にアウフヘーベンしえたという理論面の論理的事柄は、実践面としての社会主義を、空想的なものから科学的なものたらしむることができたのであり、また逆に、実践面のアウフヘーベンが理論面のアウフヘーベンを可能ならしめた、とも同時に言うことができる。すなわち、三つの思想的源泉にたいする若きマルクスのそれぞれの三つのアウフヘーベンは、論理的に単純化すれば、同一のアウフヘーベンのうちに三つのモメントとして内在的に統一されている、ということが出来る。――

以上が、「シェーマI」の左半の図式の説明である。この点のいっそう詳細な論述については、前掲の『経済哲学原理』を刊行するさいに、わたしの新たに書き加えた論文——同書の第一篇の第二章として配置してある「マルクス主義経済哲学の成立の必然性」なる論述部分——を参照されたい。

ところで、この論文においても、三つの思想的源泉のそれぞれのアウフヘーベンが一つのそれとして統一さるべき論理的根拠が論述されてあるにとどまっただけで、さきに読者に注意を喚起しておいたところの、それぞれのアウフヘーベンの統一のための背景になるはずの、すくなくともイギリスの産業革命およびフランス大革命以後の、そしてドイツの四八年の三月革命までの、三国それぞれの歴史的過程にある特殊な社会構造についての、および、それらの相互関連についての分析——すでにマルクスなりエンゲルスによっても最初から着手されたものであるが——を、総合して論述するということは、わたしには、いまだ出来ていない。このテーマは、当然ながら、わたしが随分と以前から構想を、すこしずつ具体化してきているものであるが、これを文章化するためには、多くの専門家の研究資料の読破を前提としなければならず、

ここに、その時期を予約することも到底不可能というほかはない。しかし現在までに纏めあげられた構想は、毎学年度の講義で必要なかぎりで講述している。それは、さきに第一節「はしがき」の最初のところでも述べた講義内容としての第一篇を成すところのものである。

さて、ここで再び「シェーマI」の左半の図式の説明に移るが、この図式の意味する内容については前述してきたとおりであるが、いま一つ、その内容の論理構造について、附言しておきたいことは、社会主義の立場で、ヘーゲル哲学と古典経済学との同時的止揚を成就したということを、この止揚の過程を受けとめる場所がマルクス自身の立場を創造せしめた、というふうな論理的に、わたしは説明している、ということについてである。ここに、わたしのいわゆる過程即場所なる歴史的發展の論理構造が、積極的に主張しなければならぬ必然性として、わたしの研究態度の中核をなすにいたっている理由があるのであるが、この過程即場所という論理は、それが対象的に実在する歴史的現実の運動そのものを理解するためのものとしては、いましがた述べたところの三源泉的諸思想の統一のアウフヘーベンというイデオロギーの領域に

おいて適用されるまえに、その土台にある法律、政治、経済の総合体としての現実社会の領域においてこそ、その本来のレーゾン・デートルをもつべきものでなければならぬ。このことを、三源泉の同時的止揚ということについて簡単に述べるならば、プロイセン絶対主義のイデオロギーとしてのヘーゲル哲学体系系の崩壊過程にあったドイツの歴史的现实は、

空想的社会主義を発生せしめた原動力としてのフランスの大革命の影響と、古典経済学において解明された産業革命の進展とイギリスの労働者階級の自覚的運動の発生とを、総合統一した国際的な過程を、自らを一步でも前進せしめるために受けとめて、自らの構造的体質を変革せざるをえない必然性に、ドイツの社会的現実には、あったのであり、この必然的な過程を受けとめる場所としての意識が、マルクスの意識であった、というようなことにもなる。この意識は、マルクスによって、現実化されえたとしても、彼個人の主観的意識ではなくて、当時のすべてのドイツ人の求めて到達しえなかつた普遍性のある當為としての意識であったと考えねばならない。

およそ、社会が一つの形態から他の形態に移行するばあいには、この移行の現実の過程において、過去のいっさいの歴史

的内容を止揚するだけの普遍的な当為の意識が、その現実を質的に転換するだけの威力をもつ場所的契機として、働いていなければならない。そして、この契機が主体的実践として顕現するのである。このような意味で、わたしは、歴史的现实を動的に理解するための方法論的な術語として、過程即場所なる構造的概念を、戦後において、わたしのすべての著書において使用してきている。どの著書のどの箇所であるかは、ここで調べて読者の便宜に供する時間的な余裕がないが、たまたま想起するままに取りあえず例証として、この概念の纏った叙述をしてある箇所としては、『ヘーゲル哲学と《資本論》の第一章「《資本論》の学体系的性」と『経済哲学原理』第三篇の第二章「賃労働者の定有的論理構造」と、さらに、前掲の「経済学研究の出発点にある哲学的課題」なる論文などにおいて、読者は見いだすことができるであろう。ところで、この過程即場所という術語は客体即主体といいかえてもよいのであるが、後者としての構造的概念が主として認識論的にのみ理解されがちであるにたいして、前者は対象そのものの構造を、よりよく表示し、しかも、その動的な性格を表わしている点で、歴史的现实そのものの運動の論理としては、

もっとも適切なカテゴリーでないかと、わたしは思っている。そして、このような動的構造を表現しているところのこの概念を、さらに抽象的な無規定的なカテゴリーで言表するばあいには、有即無ということにしているが、このばあいの無ということを、わたしは作用ないし働らぎを意味せしめている。たとえば、われわれが何かを考えるというばあい、その思惟作用の成果に成立するものが、何かであり対象であり、あるいは、すでに前提されている何らかの対象について思惟する作用は、対象が有のカテゴリーで言表されるかぎりで、作用は無というほかはない、というだけの意味なのである。ただ、わたしとしては、有としての対象から機械的に切り離されたかぎりでの純粹作用なり純粹無なるものを考えていないのであって、あくまで有即無であって、これが、歴史的现实の動的論理の構造を表現するための、もっとも抽象的な概念である、と主張しているのである。歴史的现实の発展的な運動を、と主張しているのだから、たんに過程的な、客体的な、すなわち有的な側面のみから見て、その場所的な、主体的な、すなわち、作用的な働らぎとしての無の契機を無視するはあいにく、いわゆる客観主義としての偏向におちいるのである。歴史的现实の運動を把握

するばあいには、ただ、そこに一貫している発展法則を分析的に定立するだけならば、一般に科学者の立場が、まさに、それであるが、それも、客観主義にとどまっているというほかはないのである。

唯物論の領域で、科学的に分析し出された客観的法則の実在性を承認したとしても、そこに人間を置き入れなければ、この実的法則も発展的なものとして把握しえないとするところの、主体性論者が存在している。たしかに、そのとおりであるとしても、問題は、歴史的現実のなかの人間が、どのような意識形態でもって、どのようにして、この実在的な客観的法則と係わり合うか、というところにある。この実在する客観的法則を必然性として把握するにとどまる一般の科学者の立場は、その意識的形態で問題にすれば悟性の立場にとどまっている。それにはたいして、いわゆる必然性を自由に転化するといふばあいの人間の意識形態は、理性でなければならぬ。そこで、問題の解明は、人間が理性の立場にたつて、客観的に実在する必然的法則を、自己の内容とする、いいかえれば主体的に把握するということになる。それにしても、この程度のことなら、主体性論者ならずとも、だれしも心得

ていることであつて、一般に科学者のばあいは、むしろ自己の仕事の限界を悟性の立場に固有のものとして、あえて厳守しているだけのことである。それに反して、すくなくとも哲学者と自称するかぎりでは、唯物論者といへども、悟性の立場にとどまることは不可能であるべきはずで、その悟性の立場の限界を超えて、悟性をも内在的契機とするより高い理性の立場にまで、自己止揚を遂げておらなければならないのである。

そこで、つぎの第二の問題は、実的法則と理性的人間とが、どのように係わり合うかの方法としての論理構造にある。わたしが唯物論における主体性の契機に、年来、つねに思索をめぐらしているのは、まさに、ここの係わり合いのところにある。そして、その論理構造をば、客体即主体、過程即場所、有即無というふうに概念的に表現しているわけである。

この言表における「即」ということは、單純に同一性のことではない。ヘーゲルの反省諸規定の最初のものとしての、区別における同一性、あるいは、区別と同一性との同一性であるとも、さしあたり、いちおう考えられても差し支えないが、ヘーゲルにおいては、有即無といつても、無の契機は媒

介的なものであって、直接的なものには有であり、彼の論理学的思惟の自己展開もまた、したがって、無を媒介にして有に始まって有に終る、という形態をとり、一つの客観主義的偏向にある弁証法であるほかなかった。それは、ヘーゲルのいう有とは、キリスト教における人格神のことであり、そのような神としての絶対精神であり、その最も抽象的な表現のカテゴリーであったからによる。ところで、マルクスのヘーゲル批判は、まさに、フォイエルバッハをつうじてであるが、この絶対精神の自己運動を対象としていた。そして、ヘーゲルを顛倒して自分の立場にしたといわれるかぎりで、レーニンの規定したように「物質の自己運動」が歴史的現実を自己展開せしめるという立場に、マルクスは、立っていたと考えることができる。

わたし自身も戦前の初期においては、この意味でマルクスの哲学的立場を理解して、そして『物質の哲学的概念』なる一冊の書物を著わしている。しかしながら、精神が有であるならば、物質は、さらに、われわれ現実の人間にとって有である。とするならば、物質としての有は、あるいは、有としての物質は、何から生じたのであろうか。有即無というかぎ

りでは、それは無から発生したというほかないであろう。無を直接的なものとして考える立場に、仏教がある。このようにして、物質の起源を追究してゆくならば、キリスト教から仏教へと、改宗したただけのことであると誤解もされそうであり、また別に、自己運動するかぎりの物質が主体的であると主張しても、——わたしの『物質の哲学的概念』の立場がそれであったのであるが、——物質の起源の問題は唯物論的には解決できないアポリアであった。わたしは、この問題に氣付いて、すでに久しい。そして、この起源の問題については、表むきには、判断中止にしていることを、ここに告白しておかなければならない。そして、わたしの哲学的な思索の焦点を、物質の主体性の問題についても、その起源にさかのぼることを避けて、その自己運動の仕方の方だけに、移行せしめてきているのである。そして、歴史的現実の運動様式を、有即無として原理的に解明し、その解明を『資本論』を「論理学」として読みなおす過程において、なんとかマルクスから学べるものを学びとろうとしているのが、戦後のわたしの思索の核心となっているわけである。この点については、とくに、前掲の「経済学研究の出発点にある哲学的課題」を参

照されたい。

戦後の日本の自然科学の領域で、物理学界が、素粒子論研究グループの活躍によって、その水準と姿態とを著しく高め変質せしめていることは周知の事実である。その素粒子論研究者のなかで弁証法的唯物論の立場にたっている若干の学者が、天文学者たちの協力を得て、物質の原初的狀態を明確にして、元素のゲネアロギーを作製しようとする企画があり、それが実行に移されていることを、わたしは早やくから知っていた。それにしても、宇宙発生当初の元素が、現在において確認されているように百個近くのものに分化される以前の融合状態にあった、ということが明瞭にされたとしても、それは、論理学的カテゴリーでは、有として規定するほかないものである。素粒子論学者と天文学者との間に遂行されつつあるこの研究テーマは、わたしが表むぎに判断中止している問題——宇宙の発生、ないし、物質の起源の問題——に無関係ではない。それにしても、有即無の論理構造の解明には、一面的にしか、すなわち、有の契機の面においてしか、役だたないはずである。それにしても、右の自然科学者の研究テーマにたいして、わたしが無関心のままで過しえないでいる

のであるが、その理由の第一は、わたしのいわゆる有即無、過程即場所なる論理構造をもつ概念規定は、わたしが唯物論の立場から到達し提唱しているかぎりのものとしては、その基礎づけのための努力の方向は、自然科学との内容的な結びつきでなければならぬ、と確信しているところにある。この点については、マルクスの諸著作が、すべて、自然を対象としようと社会を対象としようと一般に科学の領域の研究成果と、彼自身の哲学的思索との弁証法的統一として、執筆され著作されていることに疑いの余地はない。その典型として『資本論』は、後で述べるように、経済学としては、どこまでも経験的科学であることを失うことなく、しかも同時に、その体系化の方法論においては、ヘーゲルに劣ることのない哲学的思惟で一貫されていることについては、わたし自身の『資本論』研究態度の基本的精神として、ことさらに、わたしとしては、当然のこととして、そのように主張することに問題はないであらう。

つぎに第二の理由としては、第一の理由を、より内容づけられるものであるが、戦後において、わたしが諸論文で使用しはじめた「場所」という言葉の概念規定を明確にするために、

量子力学ないし素粒子論の領域ですでに確立されているフィールド・セオリーを、わたしが理解しうるかぎりで、これからの類推という方法が考えられている、ということを示しておきたい。そのために、わたし自身としても、現代物理学におけるフィールド・セオリーについての解説本を、何冊か読みましたが、数学的知識を欠除しているわたしには、その理解の殆ど不可能に近いのに気がかされて、この方向の研究

努力は、すでに長年にわたって諦めている。そうした頃に、東京の未知の若き研究者——おそらく何処かの大学の物理学のマスターコースぐらいの実力者と推定されるが——から、わたしの場所の論理を素粒子論の解説本に適用した研究ノート オフプリント一部を惠投されるといふこともあったが、このような物理学者の側からの協力が、より高度の水準において試みられるようになれば、わたし自身にとって大いに役だっただけでなく、学界にも意義のあることとして、期待せざるをえないところである。ところで、右の研究ノートでは、光を無として天体の発展の過程を説明しようとする思想が、述べられてあったように思われるが、しかし、わたしの意見としては、光も一つの物質として有と規定されるべきもので

ある。——この研究ノートの惠投にたいする挨拶状を、わたしは出しそびれて現在におよんでいるので、ここで謝意を表させていただくことにした。——とにかく、わたしは物質の起源の問題について表むきは判断中止のままにしてあるのであるが、心のうちでは秘かに、それについての思索の姿勢は、もち続けているのである。

それにしても、この問題にたいするアプローチの仕方が、わたしにおいては、わたしの処女出版としての物質の哲学的概念の叙述から推定されようように、まず「社会の起源」の問題から「生命の起源」の問題へ、さらに、これから「物質の起源」の問題へと溯源している点から見れば、この「物質の起源」の問題をマクロの世界において自らに提起していたことは、明らかである。それにたいして、戦後に気づかされている思索の方向は、ミクロの世界に有即無という概念規定のモデルがあるのではないか、ということである。それと同時に、有即無という概念規定を歴史的現実の論理として抽象しているかぎりでは、現代物理学が説明しつつあるフィールド・セオリーにおける粒子と場との相互関連を、論理的に把握しなおすべきで、それによって「即」という反省規定も具体

化しうると推定しうるとするならば、天地創造の悠久の過去に問題を設定することは、第二義的な方法的意味しかもちえず、第一義的なそれは、フィールド・セオリーからの類推もさることながら、現実の歴史過程の転換そのものの、そこにおける過去からの遺産と未来への展望との相互関連の、そのいみでの過程即場所の、論理構造を、現段階の世界状況の科学的分析の諸成果を素材として哲学的に思索するということにある、というように心に決めていたのであって、これが、わたしの研究的生活における現在の心境である。そして、このような心境は、若きマルクスの心境でもあつたはずだし、そのかぎりで『資本論』も、このような心境から出発した彼の長い研究生活の最後の体系的な著作であつたと信ずる立場から、わたしは『資本論』の研究に生涯をかけるほかないと思つている。そして、わたしが『資本論』を「論理学」として読む、といつていることも、このような意味のものであつて、ただ単に経済学的方法論を、そこから学びとるだけの狭い量見から出た発想では決してないのである。

このレジュメは、レジュメならぬ長い文章になりそうであるが、わたしの万年筆が必ずしもあらぬ方向に脱線したわけ

のものであるまいと思われる。さて、つぎに、わたしの「シエーマエ」についての説明は、その右半分の図式に移るころに、ようやくたわけであるが、それも、一見して理解されるであろうとおりに、マルクス主義者としての自覚を、マルクス自身がもつた後の長い研究的生活の過程で、最後に『資本論』の学的体系を構想的に完成してゆく順序を、彼の経済学として知られている文献によって、年代的に並べただけのものである。ここに挙げた彼の諸文献のほかに、マルクスの経済学を学ぶために必要な多くの文献のあることは、読者の知っているとおりであるが、それらの諸文献のうちで、わたしが論理的に分析しただけのものを、——といつても、それらの個々の文献の全内容にわたつて、といういみでなく、いまだ部分的にしか触れていないといった方が正しいであろうものを、——あえて列挙するにとどめたにすぎない。そのことによつて、わたしのマルクス経済学にたいする論理的分析の範囲が、量的にかぎられたものであることを、告白しておくという意図を、明示したことになる。逆に言えば、わたしの論理的分析の対象にすべきマルクスの諸文献は、なお非常に沢山に残っていることからして、今後の研究の続行

が可能であるとすれば、従来のわたしの諸著作において結論的に主張してきた若干の思想は、依然として暫定的なものではなく、今後のわたし自身の研究の進展なり、他の立場にたつて同じく論理学的研究をされている諸氏からの批判なりによって、わたし自身、反省して訂正させてゆかねばならぬものであることを、いみしている。

それにしても、わたし自身の現在までの研究成果として、確信をもって主張しうることは、マルクスがマルクス主義者としての自覚をもちえたのが『経哲手稿』においてである、とする前述のわたしの主張に、なお反省の余地あることに一步をゆづるとしても、マルクス主義の理論内容が、ヘーゲル哲学と古典経済学との同時的アウフヘーベンにおいて始めて成立しえた規定する立場から見るとは、この『経哲手稿』以前には、このような規定にかなう労作は、なかったのではなからうか。わたしは、もともと初期マルクスを研究することから、わたし自身の研究生活を初めたものでない。そのいみでは、初期マルクスの専門的研究家諸氏からの教示を受けねばならない余地のあることを、わたしは十分に自覚しているというわけである。わたしが『経哲手稿』を読むに

いたつた動機は、すでに戦前の資本論研究に接近しようとした四篇にわたる一連の労作——前掲の『資本論の弁証法的根拠』所収——のうちに索り出さねばならないが、さらに、これを詳細に論理学的に分析する必要を改めて痛感するにいたつた時期は、戦後において、わたしが『資本論』の学的体系性をヘーゲル哲学のそれと比較しつつ、その成果に或る程度の見とおしをつけることが出来かかった途中においてであった。いわば、『資本論』研究のために必要あつて初期マルクスのなかの『経哲手稿』に溯つた、というのが、わたしの研究上の手続きであつた。そのようないみからして、わたしは『経哲手稿』のなかに、後の『資本論』の学的体系性の萌芽形態、ないし、そのための原理が、秘んでいるのではないか、という視角から『経哲手稿』を分析的に研究したのであつた。そして、この研究の成果として、『資本論』の学的体系を主体的に把握するための原理を、発見することができたのであつた。

この主体的に把えなおされた『資本論』の学的体系性がどのようなものであるかについては、次節に述べることにして、本節における説明の対象になつている「シェーマI」の、そ

の右半の部分に論述をもとすならば、それは、マルクス自身の学的体系の成長の過程をしめすものと理解してもらおうことを、わたしは、いま述べた理由から読者に要請しておくものである。四四年の『経哲手稿』が、その標題の文字どおりにヘーゲルの哲学と経験科学としての古典経済学との弁証法的なアウフヘーベンであり、そして、すでに指摘しておいたように、それは、ヘーゲルの全哲学体系の前提的階梯とされてゐる『精神現象学』の「自己意識」の部分と、産業革命を前にひかえたときの古典経済学の大成者としてのスミスの学説の概観的把握とを、それぞれ、止揚内容としてゐるにとどまっている。マルクスのその後における経済学の研究は、ミスからリカルドへ、さらに古典経済学から、それ以前および彼の時代までの殆どすべての学説にわたり、しかも、それらの諸学説を構成する個々の部分的な理論内容、個々の法則、概念、範疇にたいする批判におよんでいることは、周知のとおりである。ただし、わたしが特に注意しておきたいことは、これらの個々の経済学的な概念なり法則を部分的にとり挙げて、マルクスが批判するばあいに、彼は、つねに彼自身の唯物論的に止揚すべきヘーゲルの学的体系性の全体を構

成すべき要素、すなわちモメントにまで、止揚するように頭を働かせていた、ということである。

このいみでは、マルクスの経済学についての研究過程の一步一步の進展は、同時に、ヘーゲル哲学への反省的復帰の一步一步の努力であり、そのかぎりで、経済学的な一つ一つの範疇ないし概念にたいする思弁的分析を忽がせにできなかった哲学者としての研究態度を一貫せしめた一步一步の進展であった、という点についてである。そのかぎりでマルクスは経済学者であると同時に哲学者であったのであり、悟性的立場にある科学者であると同時に、これを止揚してはじめて成立するにいたる理性の立場を、ヘーゲルから唯物論者として批判的に継承できたところの、そのいみで、ヘーゲルの全哲学体系をも止揚して、それ以上の具体的な体系的を『資本論』において構想し実現しえたところの傑れた哲学者であったと、わたしは、つねに主張しつづけてきているのである。また、そのいみで、彼の研究の一步一步の成果である経済学的諸文献のみならず最後の体系的叙述としての七三年の『資本論』こそもまた、彼の経済学研究への第一歩である『経済学および哲学についての手稿』が経済哲学であるといういみで、そ

の完成としての『資本論』もまた彼の経済哲学の完成であった、というように同じく、わたしは主張してきているのである。このような主張において、わたしに残されている問題は、マルクスの経済学の研究過程の進展の一步一步において、ヘーゲルの諸著作に復帰して彼自身の構想していた体系に繰りこんでゆく、その全研究過程を段階づけるということであろう。

このためには、彼の『グルントリセ』を分析的に読むことから始めなければならないと考えているが、この切迫した課題に着手する機会を、いまだ作りだす時間的余裕に恵まれていないというのが、正直なところ、わたしの現在の研究状況である。それにしても、すくなくとも五九年の『経済学批判』の執筆のさいには、後の『資本論』全三巻の体系的叙述についての構想は、大体において彼の念頭に表象として浮んでいたものであり、その後の六七年の『資本論』第一巻初版を、さらに、その現行版を刊行するまでに、その体系的叙述のための理論内容および方法論的順序などについては、彼の構想は幾変転していったわけであろう。ただ、ヘーゲル哲学への反省的復帰については、五九年の『経済学批判』の「序説」を

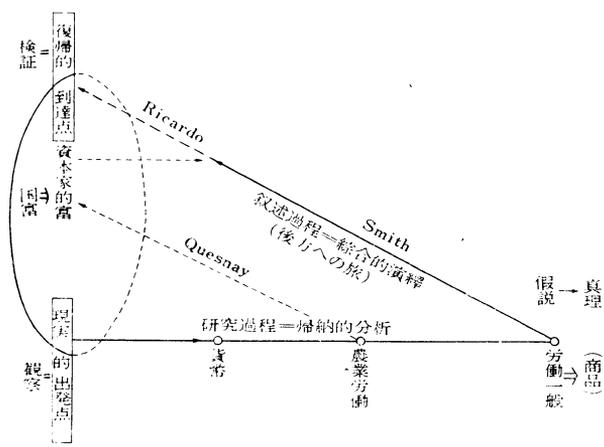
書くために、ヘーゲルの『論理学』、『精神哲学』および『法の哲学』を再読していたことが、推察されうる。さらに六七年の『資本論』第一巻初版における「価値形態」論の執筆のばあいには、ヘーゲルの『大論理学』の「本質論」における反省諸規定の論述してある箇所を繰り返し精読したことは、わたし自身の「現実的な学としての『資本論』」を執筆する過程で、わたしの確め得たところである。いわゆるプラン問題の究明にあたっては、さらに、ヘーゲル哲学への反省的復帰とも関連せしめて、説明しようとするならば、マルクスの経済学研究の一步一步の進展を、彼の経済哲学研究の一步一步の進展として、段階づけることができるはずであり、わたしのごとく、彼の研究過程にそうて、その思想を追思惟し、さらに追体験しようとするものにとっては、多くの有意義なテーマを見いだしうるものでなからうか、と思われるのである。

### 二一 あとがき

この第三節において、本報告レジュメの標題となっているところの「『資本論』の方法論的体系」について、述べる予定にしており、そのための二つの図式も描いて「シエーマII」

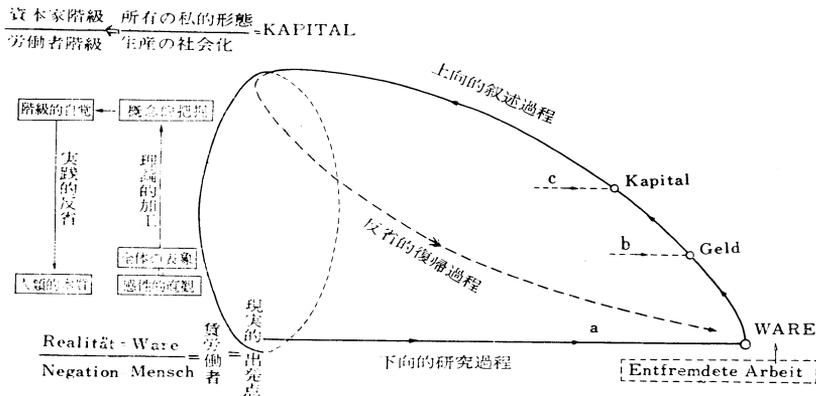
および「シエーマⅢ」とし、その説明を数枚ばかり書いてきたのであるが、その完了のためには、なお二、三日の日数を必要とすることが明瞭になったので、しかも、この原稿の締切り日も、すでに過ぎていているし、編集上に支障をきたすことを考えあわせて、右の主題についての叙述を、ここに省略することにした。ところで、この『資本論』の方法論的体系なるテーマについて、わたしとしては、すでに図式を使用し、それぞれの図式のある箇所を、ここに列挙しておくことによつて、同僚諸氏および学生諸君に参照していただくことにしたい。それらとしては、まず第一に、現代思潮社から改訂増補として昭和三九年一月に刊行した『資本論』への私の歩み』における、まさに増補した部分にあたる「図式の一般的な解説」（同書の二四五頁以下）を挙げておくべきであろう。なお、その他には、本誌第七卷第六号以下三号にわたって連載して中断してあるところの、「『資本論』体系の図式的説明」なる論稿における、その第一回の発表（三八年二月）の部分と、前掲拙著『ヘーゲル哲学と資本論』の第三章第三節の註（5）とを挙げるができる。このレジュメのために

Schema II



描いた図式二つと、それについての説明すべきことは、ここに挙げたわたし自身の諸著作における図式ないし説明と内容的に差異のあるはずのものではない。ただ論述の仕事が前節の続きとして、回顧的なものになることに、そして、わずかながらの新味を付加したものになっていた。試みに、「シエ

Schema III



「Ⅱ」および「Ⅲ」の二つの図式だけを、挿入しておいて、その新味のある叙述内容を推定してもらおう材料にしておこう。しかし、いま述べたような事情で、これらの図式二つの説明をば割愛するほかなかったことは遺憾であるが、共同研究会での報告内容の一部を執筆しえたことで、報告者としての責任を果たしたこととして大目に見ていただくことにして、この報告の主要部分を省略する言いわけでもって、このレジюмеを終るために、本節の標題を「あとがき」とさせていただくことにした。

ところで、いま一つのお詫びをしておかねばならないことは、このレジюмеを執筆するように動機づけたところの、最初の「はしがき」に書いておいた大学院の院生諸君を指導するために附加する企てであった文章も、また右の事情のもとで省略するほかになくなった、ということについてである。これは「商品論の内部における上向と下向」という題目で、このレジюмеの第四節に当てるつもりであった。このテーマは、大学院での講読ないし院生諸君の毎回の報告などをつうじて、十分に理解されていないらしく受けとられうる内容のもので、わたし自身も、このテーマについては、マルク

スのいわゆる「現実的出发点」に、その主体的契機として賃労働者を置いて、そして、この「現実的出发点」を現実的端緒とした論点に、係わらしめて論述していないのを気づいてきているのである。そこで、このテーマの理論内容について、読者に誤解を誘発せしめないだけの論述を、いま述べた視角から、他日に余暇を作りえたさいには、一つの論文として本誌に公表しなければならぬ、と思っている。そのばあいには、その前提になるべきものとして、本レジュメで割愛した「資本論」の方法論的体系」の図式による叙述を、当然ながら、繰り返えし展開することになるであらう。

昭和四十年年度第十三回研究会（二月二十一日）

▼テーマ 「近世京都商人の別家制度」

報告者 足立 政男氏

（報告要旨は、『立命館経済学』十四卷四、五号、足立政男「近世京都商人の別家制度（一）（二）」を参照）

昭和四十年年度第十四回研究会（二月四日）

▼テーマ 「金光淳氏のアジア的生産様式論

をめぐる」

報告者 手島 正毅氏

（報告要旨、意見交換は、『立命館経済学』十四卷五号、キム・クワンシウン「マルクスの『アジア的土地所有形態』と『封建的土地国有制』にかんする問題」および手島正毅氏の「解題」を参照）